

新NISA利用状況と金融リテラシー

NISAは資産運用の入り口になりつつあり、金融初心者もNISAを通して資産運用を行っていると考えられる。ただし、こうした金融初心者に関しては長期投資の有意性の理解につながる複利や分散投資の理解度が低い傾向にあり、今後は基礎的な金融知識を浸透させていくことが課題となる。

新NISA制度開始後、 資産運用経験者の増加が加速

野村総合研究所は2024年3月1日に、全国の20代から70代の男女約9,000人を対象に「貯蓄・資産運用動向」に関するWEBアンケートを実施した。本稿では、このアンケート結果から得られたNISAの最新の利用状況と今後の課題について掘り下げたい。

まず、新NISA制度が開始された2024年1月以降、資産運用経験者¹⁾の増加傾向はさらに加速していることが確認された。

2024年1月～2月の2か月間に新たに資産運用²⁾を開始した人³⁾は、20～70代全体の2%を占め、2024年3月1日時点で20～70代の人口に占める資産運用経験者の割合は37%にも達した。2023年の1年間で新たに資産運用を開始した人⁴⁾は20～70代全体の4%（2か月間で約0.7%）であったことから、新NISA制度開始後における資産運用経験者の増加スピードは、実に2023年の約3倍となっている。

また、資産運用経験者の中で、NISAで資産運用を開始した人⁵⁾の割合を見ると、2024年に資産運用を始めた人の約81%がNISAで資産運用を始めている。ここから、国民にとって資産運用の入り口と言えばNISA、となりつつある様子が伺える。

NISAのみで資産運用を行う “金融初心者”

NISAには、“長期・積立・分散投資”を基本コンセプトとして、資産運用経験者のすそ野を広げていくという狙いがある。NISAは資産運用の入り口になりつつあ

るが、実際にNISAの狙いや基本コンセプトは浸透しているのだろうか。「NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験があるグループ」（以下、Aグループ）と「NISAのみで資産運用を行っているグループ」（以下、Bグループ）⁶⁾の金融リテラシーに着目した。

このアンケートでは、OECDの金融リテラシー調査と平仄を合わせた金利・複利・インフレ・リスクリターン・分散投資に関する設問5問を回答者に聞いており、その正答数によって回答者の金融リテラシーを計測している（具体的な設問は図表1を参照）。

当該設問について、Aグループ（N=478）の平均正答数は約3.6問であるが、Bグループ（N=526）の平均正答数は約3.0問となっている。後者の平均正答数は、回答者全体（N=9,286）における平均正答数である約2.8問に近く、Bグループは、金融リテラシーが高くないことがわかる。こうした金融初心者にはNISAを通して

図表1 金融リテラシーに関する設問一覧

		正答
金利	100万円を年率2%の利息がつく預金口座に預けられました。それ以外に、この口座への入金や出金が無かった場合、1年後、口座の残高はいくらになっているでしょうか。利息にかかる税金は考慮しないで教えてください。	102万円
複利	では、5年後の口座残高はいくらになっているでしょうか。利息にかかる税金は考慮しないで教えてください。 1. 110万円より多い 2. ちょうど110万円 3. 110万円より少ない 4. 上記の条件だけでは答えられない 5. わからない	110万円より多い
インフレ	高インフレの時には、生活に使うものやサービスの値段全般が急速に上昇する。	正しい
リスクリターン	平均以上の高いリターンのある投資には、平均以上の高いリスクがあるものだ。	正しい
分散投資	1社の株を買うことは、通常、株式投資信託（何社かの株式に投資する金融商品）を買うよりも安全な投資である。	間違っている

（出所）野村総合研究所

NOTE

- 1) 回答者全体のうち、資産運用を開始した時期を、「始めた時期を覚えていない」・「資産運用をしたことがない」と回答した人以外を資産運用経験者と定義。
- 2) 株式・債券・投資信託・外貨預金など（NISAを含む）の運用を指す。
- 3) 回答者全体のうち、資産運用を開始した時期を、「2024年」と回答した人。
- 4) 回答者全体のうち、資産運用を開始した時期を、「2023年」と回答した人。
- 5) NISAの利用について、「NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験がある」・「NISAで資産運用を始めて、別の資産運用は行った経験がない」と回答した人を、NISAで資産運用を開始した人と定義。
- 6) 2020年以降に資産運用を開始した人、かつNISAの利用に関して、「NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験がある」と回答した人を「NISAで資産運用を始めて別の資産運用を行った経験があるグループ（N=478）」、「NISAで資産運用を始めて、別の資産運用は行った経験がない」と回答した人を、「NISAのみで資産運用を行っているグループ（N=526）」と定義。
なお、回答者全体のN数は9,286であるため、前者は20-70代の約5%、後者は20-70代の約6%を占める。

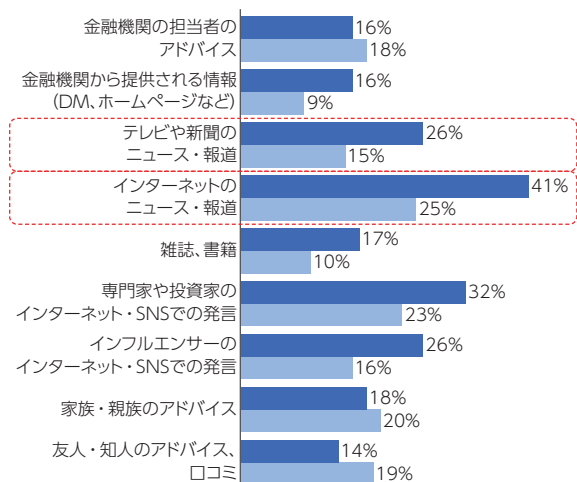
資産運用が広がったことが伺える。

金融初心者にとっての壁は “複利・分散投資”

次に各金融リテラシー設問の正答率（図表2）を見てみると、BグループはAグループよりも各設問の正答率が全体的に低い。また、複利・分散投資については正答率がそれぞれ47%、52%となっており、Bグループの約半数が、NISAの基本コンセプトの理解につながる複利・分散投資に関して、十分な知識を身につけられていないことが伺える。

ここで、AグループとBグループとの間に基礎的な金融知識の理解度に差がある理由を考察するために、両者が貯蓄や投資を行う際に重要視する情報に関する設問の回答結果（図表3）を見てみると、Bグループは「テレビや新聞のニュース・報道」・「インターネットのニュース・報道」といった情報を重要視する割合が、Aグループよりも低めとなっていた。ここからも貯蓄・投資の情報収集に対する積極性に違いがあることが伺え、これが両者における基礎的な金融知識の理解度に差を生んでい

図表3 貯蓄や投資を行う際に重要視する情報



■ 2020年以降NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験がある層 (N=478)
■ 2020年以降NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験がない層 (N=526)
(出所) 野村総合研究所

る可能性がある。

このようにアンケートからNISAは金融初心者にとって「資産運用の入り口」としての役割を十分に果たしているものの、NISAで資産運用を始めた金融初心者の中には、長期投資の有意性の理解につながる複利の効果や分散投資に関して十分に理解していない人が一定程度、存在することもわかった。

今後、新NISAで資産運用を開始した金融初心者が長期で安定的な資産形成を実現していく上では、複利や分散投資といった基礎的な金融知識の浸透面に、課題があるのではないかと。

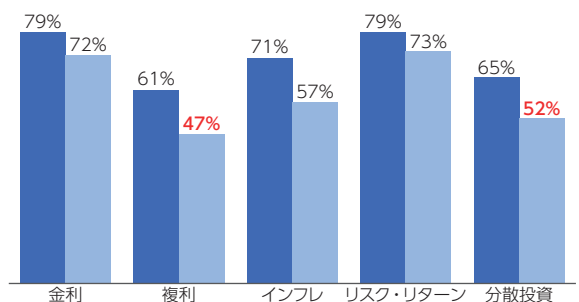
Writer's Profile



井汲 祐介 Yusuke Ikumi

金融コンサルティング部
コンサルタント
専門はリテール金融
focus@nri.co.jp

図表2 金融リテラシー設問における正答率



■ 2020年以降NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験がある層 (N=478)
■ 2020年以降NISAで資産運用を始めて、別の資産運用を行った経験がない層 (N=526)
(出所) 野村総合研究所